た。つまり牛車が荷物運搬のために通行する場所こそが、当時の市街地であり、「牛車は市街地を避けて通行するように取り締まって下さい」との懇願書が地域住民から県知事へと提出され、その添付図に当時の宮崎市街地が記されている。

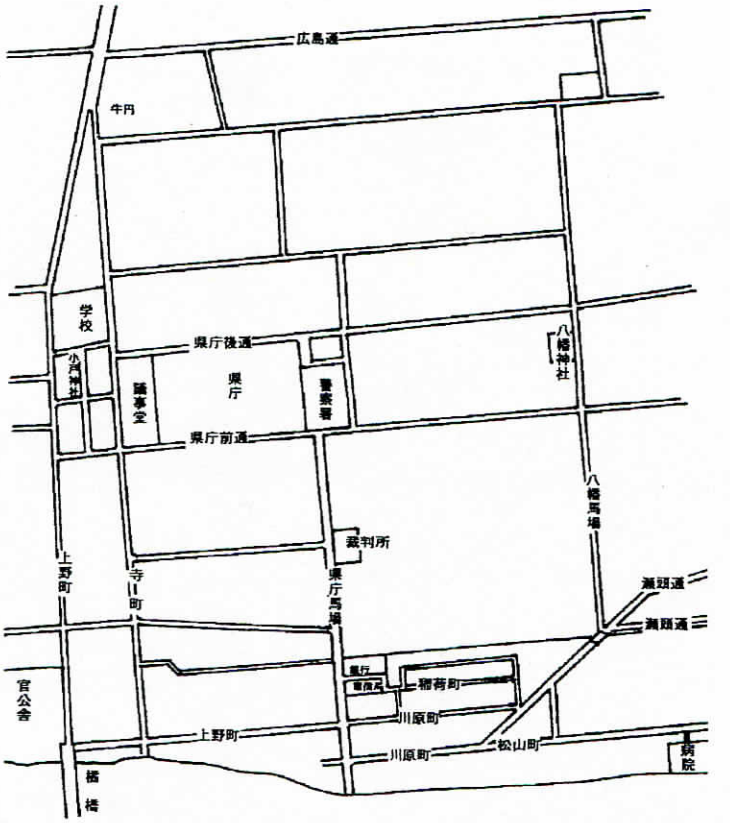

図4　明治17年「牛車止眼之儀及び添付図」（宮崎県古文書より模写）

その添付図の原本を縮小すると文字も読めないので、筆者の模写図（図4）を掲載するが、南は大淀川、西は上野町、北は広島通りそして東は八幡馬場（宮崎八幡宮東側の道路）に囲まれる地域が描かれている。さらに、県庁・議事堂・警察署・裁判所・電信局・学校・官公舎・病院・銀行・小戸神社・八幡神社そして上野町・川原町・松山町・稲荷町・瀬頭町・寺町・県庁前通・県庁後通・八幡馬場・広島通・牛円など街に関する多くの情報が記されている。縮尺等を含めた正確性は別として宮崎にやっと誕生した市街地を今に伝えてくれる最初の地図である。

五　「明治十八年」を冠する宮崎市街図

「明治十八年」という年代を冠した宮崎市街図が数種現存しているが、それ以前から現在に至るまで地図名に年代を冠した地図はおそらく存在しない不思議な「明治十八年」である。

時代が前後するが、筆者が地図を確認できた流れとともに、「明治十八年の宮崎市街図」を検証する。大正三年九月二十二日発行の『宮崎町史』に「明治十八年頃ノ宮崎町市街図」（図5）という地図が添付されている。宮崎町制が施行されたのは明治二十二年五月一日であるにもかかわらず「明治十八年頃ノ宮崎町」という実に曖昧なタイトルの地図である。極めて見づらいが、あえて原本をそのまま掲載するが、実に辺鄙（へんぴ）な田舎町を漂わせる地図であり、当初は宮崎町史を作成した人がかなりいい加減な気持ちで適当に書いた地図に違いないと考えていた。その後発見した史料に大正三年一月一日付の『日州新聞』の「三十年前の宮崎」という特集記事がある。そこには「現今（注・大正三年）の宮崎町市街図」と「明治十八年現在宮崎町市街図」（本稿未掲載）が併記されている。

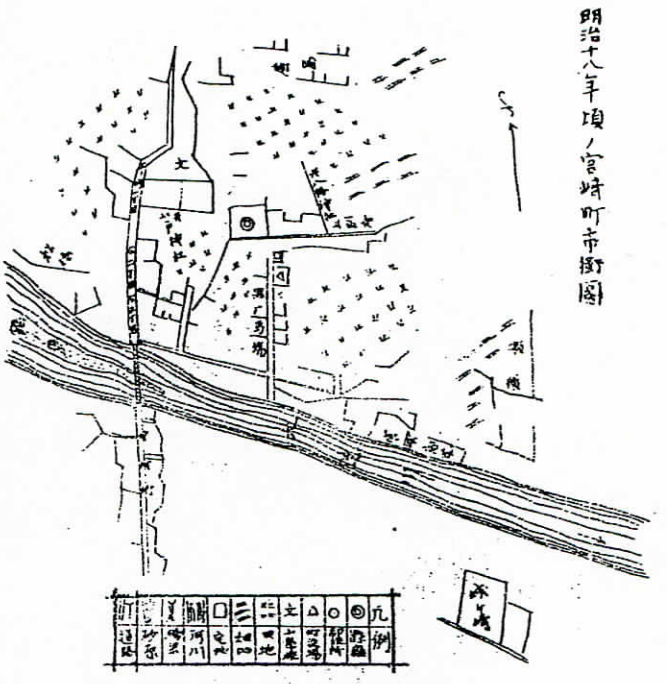

図５「明治18年頃ノ宮崎町市街図」
（大正四年刊「宮崎町史」内）

極めて見づらい地図であるが『宮崎町史』の地図とは全く異質な地図であり、とても同じ明治十八年の宮崎町市街図とは思えなかった。しかし、この二つの地図に描かれた市街地・道路は全く同じ地域に限られており、大正三年の一月一日に発行された日州新聞の地図を宮崎町史が簡略してトレースした可能性が考えられた。

さらに大正四年発行の『宮崎県大観』と明治四十四年発行の『大日本地誌』に添付された「宮崎町」地図はともに年代の記載はないものの、前二図と同様の地図（本稿未掲載）である。年代の記載がないとはいえ、大正三年と明治四十四年に発刊した出版物であるにもかかわらず、明治二十一年に開削された国道三十六号線（後の橘通り部分）を記載していないことは極めて不自然であった。

平成七年三月三十一日に『宮崎県史資料編近・現代3』が刊行され、この中に「明治十八年宮崎県管内全図」（宮崎県立総合博物館蔵）が掲載された。この地図には明治十七年十二月付の「例言（凡例と同じ）」が付記されているが、出版は翌十八年六月となっている。例言に「本図は旧宮崎県管内地面を縮写せるものなり蓋し原図業を明治六年に起し其成る時県治己に鹿児島に属す客歳再ひ本県分置せらるるに及ひ郡界道路等髄て変革す令実際に就き更に校訂を加う　宮崎県地理課」とあるように、旧宮崎県時代に地図作成を行うも完成した時には鹿児島県に併合されており、再置に際し郡境や道路を訂正して発行した宮崎県地図である。前述した明治九年「宮崎県地図」はおそらくこの地図の原図であると思われるが、国会図書館所蔵の原物を筆者は確認できていない。

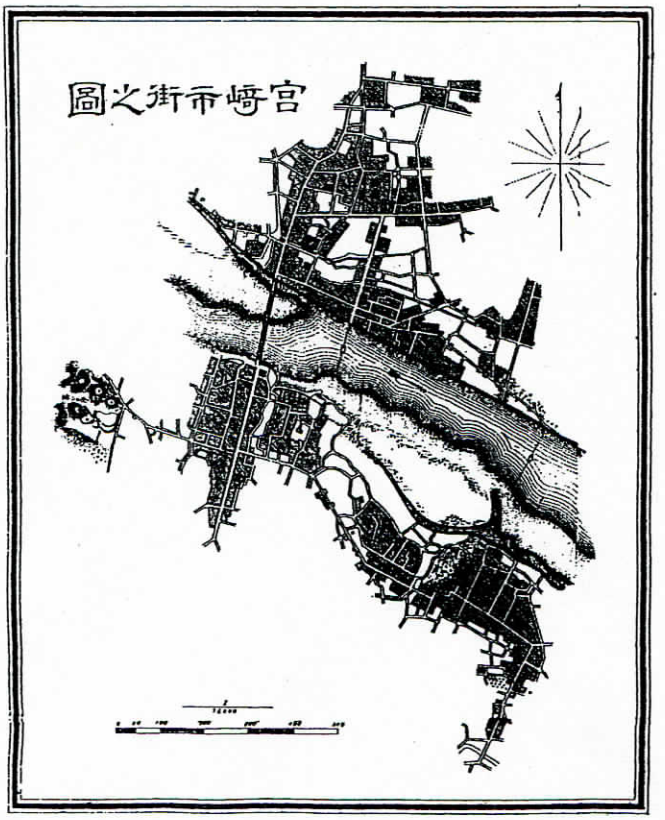

図６　明治18年発行「宮崎市街之図」

例言には「図傍載する所宮崎延岡高鍋飫肥都城の五市街は本年（注・明治十七年）更に実測したるものなり」と記され、「宮崎市街之図　縮尺二万五千分の一」（図６）が記載されている。明治九

年の「宮崎県地図」に記載されなかった宮崎市街が描かれた事実は、宮崎県再置により急速に宮崎市街が形成されていったとも判断される。

同図の原図は約一〇㎝×一三㎝の葉書大の大きさで「二万五千分の一の縮尺」の詳細な地図である。（実測は明治十七年であるが）またしても「明治十八年」を冠したこの地図は前述の「明治十八年頃ノ宮崎町市街図」とは全く別の街を描いたかのような地図である。とくに細かい道路や市街地を斜線で記すなど「街の雰囲気を醸し出す」地図である。しかし、明治十七年の宮崎町域にはわずかに六五九戸しか存在せず、これを考慮すれば市街地を示すこの斜線は我々に与える目の錯覚と考えるべきである。

「明治十八年」というキーワードのもとに前四図と比べると、この「明治十八年宮崎県管内全図に掲載された宮崎市街之図」こそが全ての地図の原本であり、とくに『宮崎町史』、『宮崎県大観』に記載された「宮崎町市街図」は主な道路だけをトレースした地図であることが理解できる。「明治十八年頃」、「明治十八年現在」という不思議な表現はこの「明治十八年宮崎市街之図」をトレースしたという意味合いで使用されたと思われる。

この実測された地図は初めて「宮崎市街」を冠し、さらに数十年経ってもその完成度は群を抜いており、紛れも無い宮崎市街図のルーツとして長年に渡り使用されていたに違いない。

六　陸地測量部の地図

二十万分の一地図の製作は明治十七年に参謀本部陸軍部測量部（後の大日本帝国陸地測量部）によって始まった。この地図は正式測量によるものではなく、伊能図や府県作成の地図などから編纂されたために「輯製（しゅうせい）二十万分の一地図」と呼ばれ、丘陵地を「ケバ」で描いているのが特徴である。全国の刊行は明治十九年から同二十四年までという驚くべき早さで行われ[11]、宮崎部分は明治二十二年四月一日に発行された（図7）。二十万分の一地図を市街図というには語弊があるが、地図史の上では重要であり、実測地図ではないとはいえ、初めて国が作成した宮崎の地図である。

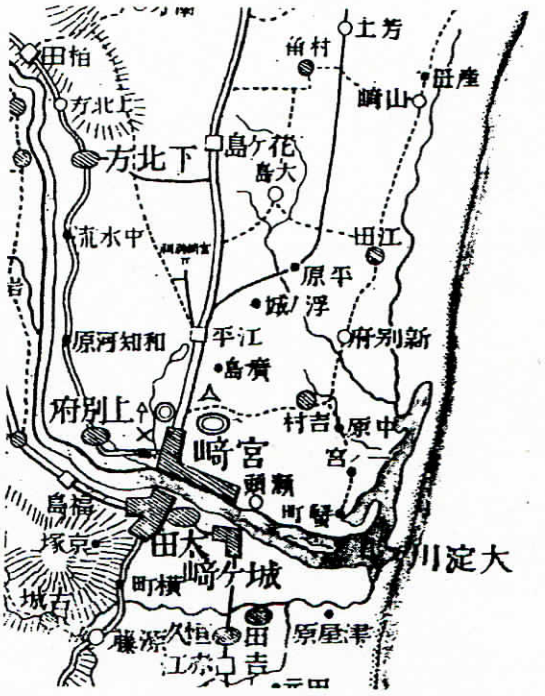

図7　明治22年発行
「二十万分の一地図　宮崎」部分

明治十三年に架設された橘橋が記載されていないことや、（地図の縮尺上明確にはわからないが）前述したように明治二十一年に市街地部分が開削された国道三十六号線（橘通り）が記載されておらず、県庁のある上別府村の文字の位置が西方にずれていることなど基本的要素に問題があるが、当時の宮崎周辺をおおまかに知ることのできる地図として評価できる。

同地図では現在（北バイパス完成以前）の国道十号にほぼ一致して江平町～蓮ケ池～島之内を結ぶ道路が国道として描かれている。しかし、明治三十二年「二十万分の一地図」（図8）では、国道は江平から北東に出て大島村から北方向へと向かう道路として描かれている。同じ陸地測量部が作成した二つの地図を比較すると、明治二十二～三十二年の間に「大分街道（後述）」の改修工事が行われ、